

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370547

研究課題名(和文) 本土諸方言動詞・形容詞の活用・アクセント活用の原理と変異条件についての総合的研究

研究課題名(英文) A study of principles and determinant factors of conjugation and accentual conjugation of Japanese verbs and adjectives

研究代表者

屋名池 誠 (YANAIKE, MAKOTO)

慶應義塾大学・文学部(三田)・教授

研究者番号：00182361

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：動詞・形容詞の活用およびアクセント活用の機構について、日本語諸方言すべてに一貫する原理と、方言それぞれに固有の独自の決定要因を明らかにするため、重要地点を12箇所選定して臨地調査した。

その結果、活用に関しては、多くの方言においては音便各種は産出された音便形が同音衝突を生じないように分担配置されているにもかかわらず、衝突を忌避しないタイプの方言も存在することが明らかになった。アクセント活用に関しては、京阪式アクセント中心部の方言では活用形の長さは例外的変異を生み出す条件にとどまっているのに、周辺部の多くの方言では変異条件にとどまらずアクセントの決定要因として働いていることが新たに判明した。

研究成果の概要(英文)：I researched 12 areas which have dialects with unique conjugation and accentual conjugation of verbs and adjectives. Detailed analysis of collected data shows that length of the word form made by conjugation is one of the determinant factors for verb accent in the dialects in the suburb of the area of Keihan-type accentual system.

研究分野：人文学

キーワード：方言 活用 アクセント活用 音便形 撥音便 語形の長さ

### 1. 研究開始当初の背景

日本語の動詞・形容詞の活用の研究は、江戸時代以来営々と続けられてきているが、これまで、日本語の諸方言の活用の多様なありかたまで、統一的かつ精密に記述できる方法は提案されてきていない。これでは、各地方言の精密な記述がむずかしいだけでなく、諸方言を同じ基準で比較・対照してゆくことによって活用様式の地理的な広がりや断絶を見たりすることもむずかしく、ましてや方言間の差異が生じるプロセスや機構を明らかにしたり、さらには日本語動詞・形容詞の活用の存在意義を解明したり、系譜関係を再建するなど、高次のレベルの研究に歩を進めることはほとんど不可能であった。

日本語の動詞・形容詞は活用する際、アクセントも語形変化するが、この「アクセント活用」の研究は、活用研究以上に寥々たる状況にとどまっているのが現状である。日本語のアクセント研究は、理論研究・方言研究・歴史的研究いずれの面でも高い水準を誇っているが、「アクセント活用」のような形態論レベルの現象にはほとんど研究の手が及んでいなかったのである。「アクセント活用」には、活用以上に方言差が顕著に見られるにも関わらず、適切な記述方法が開発されてこなかったために、諸方言での記述研究すらほとんどおこなわれていないのが現状である。

「アクセント活用」は活用と深く関わっており、アクセント面だけを取り出して研究することはできない。方言活用の記述方法の研究が遅れているために、「アクセント活用」の研究もそれに連動して進展してこなかったのである。

研究代表者は、上記の問題意識にたって、日本語動詞・形容詞の活用と「アクセント活用」とを切り離さず、動詞・形容詞の語形変化の二つの側面として捉えつつ、日本語の地理的・時代的変種すべてに適用可能な汎用性のある記述方法の開発をめざして研究を進めてきた。成果としての私案は、『新版 日本語教育事典』(日本語教育学会編 大修館書店)の研究代表者執筆項目「活用の捉え方」および「活用とアクセント」にまとめている。

さらに、平成20年度～22年度科学研究費補助金基盤研究(C)「日本語動詞・形容詞の活用・アクセント活用の記述方法の研究」、平成23年度～25年度基盤研究(C)「日本語諸方言動詞・形容詞の活用・アクセント活用の系譜関係解明のための基礎的研究」を受給して、特異な活用・「アクセント活用」を有する諸地域の方言を臨地調査し、そのデータの解析を通して、この記述方法の有効性を検証してきた。

検証では、諸方言を比較・対照するために必要と考えられる諸条件をすべて組み込んで選択された動詞・形容詞語例について、複雑な語形変化形まで網羅する精密・詳細な調査をおこない、これによって同一の方法によって均質な水準で捉えられた諸方言の動

詞・形容詞の活用・「アクセント活用」のデータを収集・蓄積してこれを行ってきた。

### 2. 研究の目的

研究代表者のこれまでの一連の調査・研究で未調査であった本地方言の重要地点のデータの収集・整備を継続するなかで、方言や時代語に固有の特異性・偶有性ともいふべき決定要因でいまだ見落とされているものがないかを精査して日本語の歴史的・方言的全変種の記述に必要な・十分な記述装置を完成させるとともに、日本語の時代的・地域的変種すべてに通底・一貫する動詞・形容詞の活用・「アクセント活用」の原理と、方言間の差異・時代による変遷が生じるプロセスと機構を明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

活用・「アクセント活用」に関して特異な性格を有する重要な方言であるにもかかわらず、いまだ精密・詳細なデータが得られていない地点を選定し臨地調査をおこなう。

諸方言の通有性と偶有性を精密にとらえるべく、活用・「アクセント活用」によって活用形の語形を産出する際に必要となる可能性がある形態的なファクターを考え得る限り組み込んだ動詞・形容詞リストを準備して調査をおこなった。

### 4. 研究成果

本研究の研究期間中に、以下の12地点において方言の臨地調査をおこなった。

長野県東御市  
新潟県佐渡市北川内  
富山県氷見市  
石川県七尾市能登島向田  
石川県七尾市能登島須曾  
石川県七尾市田鶴浜町  
石川県白山市白峰  
福井県坂井市三国町  
福井県丹生郡越前町小樟  
三重県南牟婁郡御浜町阿田和  
島根県出雲市平田町  
岡山県笠岡市

長野県東御市はガ行動詞の音便形が特異であることで知られる東信地域の代表として活用の調査のために選定したが、他の地点は主にアクセント活用の観点から設定したものである。

能登島は小さな島の中に京阪式に近いアクセント体系から東京式に近いアクセント体系までが共存し、東西のアクセントがいかに成立したかを考える際大きな意味をもつ重要な地域とされている。

阿田和も、京阪式アクセントの近畿地方中心部にあつて東京式のアクセント体系を有する奥吉野と、京阪式の和歌山県のアクセントとの境界地域であり、これも東西アクセント分岐を考える際の鍵を握る方言として従

来注目されてきた。

佐渡の西北海岸部(「外海府」)は特徴的なアクセントを持つことで知られ、白峰は特異なアクセント体系を有することで有名な山村である。出雲は東京式アクセントの特徴的な変異タイプで母音の広狭によるアクセントシフトなどで知られる地域である。

三国と越前海岸小樟は、京阪アクセント地域にあってアクセントが無型化してしまっている福井市の周辺部にあって、それぞれ独自の方向へ変化している方言である。なかでも、越前海岸は琉球をのぞく本土にあって隠岐とこののみが3型アクセントというきわめてめずらしい体系をもつ地域として近年注目を集めている。

その他の地点は、そうした特異な地域と隣接する地点として、特異地域との関係を見るために選定した。氷見と田鶴浜は能登島に近い、それぞれ富山アクセント、能登アクセントの地域として、笠岡は、きわめて複雑なアクセント体系を有する瀬戸内海の笠岡諸島の真鍋島、高見島(平成23年度~25年度の科研費研究で調査)の本土側の東京式アクセントの地点である。

## (1) 活用に関して

ほとんどの方言において、動詞の音便はそれぞれの種類の音便が作り出す音便形が同音衝突を起こさないように、分担・配置されているのが普通である。

サ行イ音便は、もともともっていた西日本方言でも、カ行イ音便との衝突を避けて、衰退してしまっているし、奥吉野の洞川方言などではサ行イ音便が衰退せず現在でも広く行われているものの「サイサ(《刺した》・サ行イ音便)」のように後続要素のtをsに変えることで「サイタ(《割いた》・カ行イ音便)」との衝突を回避している。

しかし、今回調査した能登島方言ではサ行イ音便が広く用いられているにもかかわらずカ行イ音便との回避はおこなわれておらず、音便形での同音衝突が多くおきている。

また今回調査した長野県の東信地域(東御市)ではガ行動詞が他方言のようにイ音便にはならず撥音便になっており(例「コンダ」《漕いだ》)、バ行・マ行の動詞の撥音便形(例「コンダ」《混んだ》)と多くの衝突をおこしている。

このように音便形において同音衝突を厭わない方言の存在が明らかになったことで音便形機構の成立についてあらためて熟考することが必要となった。

## (2) アクセント活用に関して

能登島は小さな島の中に京阪式アクセントの集落と東京式の集落が共存する特異な地域として知られている。なかでも向田方言は東京のアクセント体系に近いとされて

きたが、アクセント活用に関しては、東京方言とはかなり異質で、周辺の北陸方言からの変異であることを示す特徴を多く備えていることが明らかになった。今回、精密な記述装置をもちいたことの成果といえる。

福井県三国町方言は、無型アクセントの福井市の隣接地域で、アクセントのゆれのほげしい「三国式アクセント」の地域として知られている。個人差も大きいことが報告されているが、今回調査した個人は、同じ動詞の同じ活用形に複数の型のアクセントが許されており無型に近づいてはいるものの「この活用形ではこの型のアクセントだけは許されない」という大変めずらしい、いわば否定的な型指定がおこなわれる機構をもっていることが明らかになった。有型アクセントが無型アクセントへ向かう中間期特有のあり方と考えられるが、こうしたあり方も記述できるように記述方法を拡張する必要がある。

京阪式アクセント地域の中央部の京都・大阪の方言では、活用によって産出された動詞活用形の長さは、動詞アクセントの決定要因ではなく、一部の例外的な変異形出現の条件にすぎないのだが、今回京阪式アクセントの周辺部で、動詞アクセントが従来知られていた

A 動詞語幹のアクセント素性

B 語尾の潜在的アクセント核位置

の2大要因だけでなく、

C 活用形のできあがりの長さ

が第3の要因となっていたり(能登島など)、Aの代わりになっている(佐渡北川内など)方言が多く見いだされた。短い動詞と長い動詞でアクセントが異なるだけでなく、その中間の長さの動詞では同じ動詞であるのに活用形によって長さが変わるとアクセントも変わるのである。

従来の記述装置の拡張と、各体系間の系譜関係の再検討を迫られることになった。

越前海岸小樟方言は最近発見された3型アクセントの地域であり、活用形の長さによって次々アクセントが変わるきわめて特異な機構を有していることが明らかになった。

京阪式だけではなく、東京式に属する出雲方言においても、長さによるアクセントシフトなど特異な現象が見いだされた。

「語形の長さ」という要因にもさまざまな次元のものがあることが予想されるので、今後のさらなる検討を積み重ねる必要がある。

今回の調査・研究では、従来見いだされたことのない多くの事実を掘り起こすことができ、大変有意義な成果が得られたが、活用・アクセント活用については、拙速に総括を試みるのは時期尚早であり、まだまだ多く

の方言のデータの地道な収集が必要であることが明らかにもなった。

今後の調査・研究を期したい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

屋名池 誠(YANAIKE, Makoto)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：00182361

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者 なし